

有木 大輔（中国文学）

唐詩選集の編纂と受容に関する研究

本論文は、中国明清期に編集・出版された唐詩詩集、就中『唐詩選』および『全唐詩』を主たる研究対象として、その編纂過程、出版の時代背景や文壇の状況、更にはそれらの受容の形態等について、本論文の提出者が新たに発見した資料に基づき、実証的に考証したものである。

本論は、上篇「『唐詩選』の成立と民間受容」、中篇「国家事業としての『全唐詩』編纂」、下篇「江戸期における『唐詩選』受容」の三篇から成る。上篇第一章「『唐詩選』成立に関する一考察- 汪時元の出版活動と李攀龍の遺稿-」では、『唐詩選』の出版における李攀龍の門弟汪時元の関わりについて考察した。汪著『竹里館詩説』は本論文の提出者の新発見による。第二章「明末福建における『唐詩選』類本の営利出版」では、明末福建における『唐詩選』類本の出版状況についてまとめ、第三章「清初における『唐詩選』注本の刊行- 呉呉山注『唐詩選』について-」では、清初江南の呉呉山の家塾における『唐詩選』注釈の実態を明らかにした。中編第四章「『全唐詩』補綴作業に対する朱彝尊の関与」では、『全唐詩』の補綴に対する朱彝尊の関与の仕方について分析し、第五章「曹寅の奏摺から見た御定『全唐詩』の成書過程」では、曹寅の康熙帝への奏摺を詳細に読み込むことによって、『全唐詩』が如何に早急の完成を迫られていたかを解明した。これらの資料も本論文の提出者が初めて言及したものである。更に下篇第六章「嵩山房小林新兵衛による『唐詩訓解』排斥と『唐詩選』独占の実態について、訴訟記録『済帳記録』を引用して明らかにした。第七章「『唐詩選画本』における絵師の地位」は、『唐詩選画本』における絵師葛飾北斎や高井蘭山の関わり方について論じ、第八章「宇野東山による『唐詩選』注の演変- 日本における呉呉山注『唐詩選』の受容-」は、日本における呉呉山注『唐詩選』の翻刻の実態について、従来言及されなかった資料を用いて解明した。また、附録の「朱彝尊『全唐詩未備書目』所収の唐詩集について」、「『唐詩選』版本リスト」も、本論文の提出者による熱心で綿密な調査の成果であり、学術的価値がある。

およそ論文の価値は、先行する研究を十分に踏まえつつ、論文の執筆者の新しい考え方や新発見の資料に基づき、自説を実証的に論述して従来の定説を是正し、学界の研究を一步先に進めることにあるであろう。『唐詩選』や『全唐詩』をめぐっては、中国や日本において相当の先行研究が蓄積されているが、本論文の提出者はそれらを丹念に検討しつつ、上述の新資料を駆使しながら、『唐詩選』や『全唐詩』の成立の背景や受容の仕方について、従来必ずしも明らかでなかった部分の解明に果敢に取り組んだ。もとより、これらのテーマの解決は容易ではなく、本論文の提出者の分析を経てもなお不明の点は残されているが、本論文は、従来の定説に対して再検討を迫る学術的価値が十分に認められる。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つと認めるものである。